『資本主義の終焉と歴史の危機』を読む

昨年 3 月に刊行され、8 月には 10 刷 10 万部突破という、エコノミスト・水野和夫さんの話題の集英社新書である。表紙カバー裏から。－資本主義の最終局面にいち早く立つ日本。世界史上、極めて稀な長期にわたるゼロ金利が示すものは、資本を投資しても利潤の出ない資本主義の「死」だ。他の先進国でも日本化は進み、近代を支えてきた資本主義というシステムが音を立てて崩れようとしている。16 世紀以来、世界を規定してきた資本主義というシステムがついに終焉に向かい、混沌をきわめていく「歴史の危機」。世界経済だけでなく、国民国家をも解体させる大転換期に我々は立っている。500 年ぶりのこの大転換期に日本がなすべきことは?　異常な利子率の低下という「負の条件」をプラスに転化し、新たなシステムを構築するための画期的な書!

資本主義の現実を巨視的、リアルに描いており、マクロな視野から問題を捉えるうえで参考になることが多かった。とりわけ示唆を受けた指摘を箇条書きしておきたい。

・グローバリゼーションとは、南北で仕切られていた格差を北側と南側各々に再配置するプロセスといえる。

・西欧的な近代化は途上国から資源を安く購入することで成り立つ。途上国の近代化によって、その条件がもはや消滅した。

・1974 年から始まる利子率=利潤率の低下に対して、アメリカは IT と結びついた「電子・金融空間」をつくり出すことによって、新たな利潤の獲得を図る。

・資本主義の本質は「中心/周辺」という分割にもとづいて、富やマネーを「周辺」から「蒐集」(しゅうしゅう)し、「中心」に集中させること。

・グローバル資本主義とは、国家の内側にある社会の均質性を消滅させ、国家の内側に「中心/周辺」を生み出していくシステムだ。

・ 利子率がゼロに近づいたということは、資本の自己増殖が臨界点に達していること、すなわち資本主義が終焉期に入っていることを意味している。この「歴史の危機」に直面して、資本主義からのソフト・ランディングを求めるのか、それとも「強欲」資本主義をさらに純化させて成長にしがみつくのか。後者の先にあるのは、破局的なバブル崩壊というハード・ランディングであるにもかかわらず、先進諸国はいまなお成長の病に取りつかれてしまっている。資本の自己増殖が難しくなって以来、国境の内側や未来世代からの収奪まで起きるようになった。その代償は遠くない将来、経済危機のみならず、国民国家の危機、民主主義の危機、地球持続可能性の危機という形で顕在化してくる。

(2015 年 1 月 19 日)